

児童健全育成賞（数納賞）佳作

6年間継続した浅野町児童館「おいしいよ農園」会社経営ごっこ —子どもの好奇心「面白い」を中心に仲間と共に体験する活動—

石川県金沢市

金沢市立浅野町児童館 児童厚生員 三浦 啓子

1. はじめに

(1) 浅野町児童館の施設環境と利用状況

浅野町児童館は石川県金沢市にあり、1988年に福祉センター兼用の児童センターとして開館しました。翌年4月、開館2年目に保護者が運営する学童保育が児童館に入り、浅野町児童館は放課後児童クラブ（以下児童クラブ）併設館になりました。それ以降、児童館利用の子どもと児童クラブ利用の子どもは、共に同じ施設で活動を継続しています。

浅野町児童館、児童クラブは、地域の方と児童館活動、児童クラブの活動に取り組み仲間集団や異年齢集団作りに奮闘しています。

浅野町児童館は、自然環境に恵まれ、周辺には用水や児童公園があります。用水で、ザリガニ釣りや小魚を捕まえ、時には、亀や魚を見つけ大騒ぎしています。

児童公園では、砂遊び、木登り、冬には雪遊びを満喫しています。そうした活動の中、障害を持つ中学生一人が、週に二日間、児童館を利用しています。また、石川県立いしかわ特別支援学校に通う高校生一人が、ほぼ毎日の様に児童館を利用しています。

この高校生は、2016年小学6年生の時に浅野町児童館「おいしいよ農園」会社経営ごっこ（以下「おいしいよ農園活動」）において、1年目社長を努めました。

「おいしいよ農園活動」は、地域の方、保護

者、学校と連携して浅野町児童館で元気に遊んでいる子ども、小学生が会社役員（運営役員）を担いながら、6年間継続した活動です。

子どもが意見を述べ、小学生と保護者が農作物の栽培、商品化、販売などに携わり、意見交換を通じて、コミュニケーション能力を高め、気配りと連携による、地域と子どもが心豊かに成長できることを目指した活動です。

(2) 「おいしいよ農園活動」の基本的考え方

「おいしいよ農園活動」は、児童館と放課後児童クラブの連携で取り組んでいます。

子どもが「おいしいよ農園活動」を主体的に展開できる様に、活動計画を立てリードすることが肝要です。子ども自身が、農作物の栽培、商品開発、販売など、活動を展開することが、『面白い』と感ずることが大切で、如何にして子どもの好奇心を刺激するか、「何を、どうしたら」子どもの探求心をくすぐれるかが、重要と考えます。

農作物の栽培、商品化、販売など、活動が上手く行った時の達成感と上手く行かなかった時の辛い気持ち、意見が通じ合わない時の気持ちなど仲間と共感できる仲間作りを丁寧に行うことを大切にしています。

「おいしいよ農園活動」に対する、子どもの参加・不参加は、子どもの意思を尊重して柔軟に対応することとし、子どもの「主体性」「好奇心」「探求心」を強く意識して「おいしいよ

農園活動」を展開することを基本的な考え方としました。

(3) 児童館における「おいしいよ農園活動」の意義

浅野町児童館が持つ特性（拠点性、多機能性、地域性）を生かした、地域の活性化・街づくりを目指す児童館の役割『遊びによる子ども育成活動』、健全育成の一環として、浅野町児童館で「おいしいよ農園活動」を継続してきました。

「おいしいよ農園活動」は「子ども自身が考え決定して活動に取り組む」ことを基本として、異年齢集団が、継続的に活動するための条件

- ①活動自体の魅力（子どもの好奇心・探究心をくすぐる）向上
- ②専門的知識（栽培・商品化・販売等）があるNPOや地域の人と連携して活動に取り組む
- ③参加する子どもの意向（参加内容による参加不参加の意思表示）に左右されない運営体制の維持

であり、結果として「おいしいよ農園活動」が子どもの居心地の良い居場所の確保につながります。

子ども達が自分達の代表（社長、副社長）を中心に自分達自身で、活動（栽培・商品化・販売等）を牽引できる様になります。

以下に、6年間にわたる「おいしいよ農園活動」を報告します。

2. 6年間継続した浅野町児童館「おいしいよ農園活動」

運営体制

「おいしいよ農園活動」の社長は、当初、児童厚生員が任命し、他の役員については、参加する子どもに委ねました。活動は毎月2回程度で、児童館集合後、現地で活動するが、その内容・役割については事前に参加者（子ども）による協議で決定しております。

子どもが役員を決めることで活動における責任感が増し、集団活動効率も上がると感じます。

活動内容

米とさつまいもの栽培・収穫・商品化（加工品を含）・販売を行う目的を達成するプロセスを子どもが主体に実施する。

具体的な活動として、農作業の日程やチラシ制作、商品開発、パッケージデザインの考案、販売方法などを、「おいしいよ農園活動」として取組み、米栽培は地域の田んぼで行い、さつまいも栽培は、地域外にある農業生産法人所有の畑で行っています。

米の商品名は「めっちゃ・う米」とし、毎年、子どもが田植え、稲刈り、天日干しを行い、米2合、300g毎、米袋に200個詰め、商品ラベルは、毎年工夫しながら参加児童と保護者が、地域小学校を巻き込み、新しく制作しています。

さつまいも栽培は、「おいしいよ農園さつまいも」とし、400株の苗を植え、収穫を行い、800g毎、ナイロン袋に詰めます。

その他、「農園キャラクターシールとバッジ」「めっちゃ・う米・おはぎ」「さつまいもアイス」「さつまいもパンケーキ」「おいしいよ農園かるた」「めっちゃ・あめ一米飴」などの商品を開発・販売を通して、子どもや保護者、地域の方に愛され人気があり、子どもたちの達成感や満足感の充足につながり、児童館の子どもの居場所確保と活動報告会を兼ねた収穫祭等、毎年の活動による地域と児童館の連携も深まりました。もちろん、行事開催時における司会や参加者への挨拶は社長である子どもが行います。

(1) 1年目「おいしいよ農園活動」経過と課題

2016年、児童館での活動において、高学年の力を発揮できる「面白い」活動はないか考えていた。副館長から「稲刈りが終わった田んぼ使ってもいいよ」と声をかけて頂いた。いきなり、田んぼでの泥遊びでは、その後の発展性がなく、また、田植えなど農作業体験は他事例も多く、このチャンスを生かす、子どもが活動内容に主体的に参加できる方法を模索しました。

子ども自身が農作物の栽培や商品開発、販売など、農園会社経営に携わる遊びを展開することで、好奇心や探求心を刺激し、子どもの意見

を述べる活動になり得、主体性が存分に発揮され得る活動になると考えました。

浅野町児童館のブランド米にこだわり、子どもが手作業で田植えや稲刈り、稲を乾燥させる「はぎ」を立て、天日干しを行うなど、米作りの一連作業を体験しました。

田植は、初めて田んぼに入る子どもも多く「ぬめ、ぬめや」「気持ち悪い」「足が抜けない」など声を上げ、頑張り、田植え終了後は、地域の集会場を借り、参加者全員でおやつを食べ、自己紹介や感想を話し交流しました。

交流時に、田んぼに農園の看板を立てようとの意見で、絵が得意な保護者のお父さんの協力を得て、絵を描き、田植えが終わった田んぼに立てました。

野菜（白菜）の栽培は、児童館で黒い柔らかいポット（鉢）に、種をまき育て、発芽した苗を大きく育てる為、ポットに1本だけ残す、摘芽作業を行いました。また、蝶々が苗に卵を産まない様、ネットをかける作業も行いました。

児童館で育てた白菜の苗は、地域の畑に黒いナイロンをかぶせ穴をあけ植えました。苗植えは晴天に恵まれましたが、白菜の定植は、小雨で風が吹く中での農作業になり、疲労困憊状態でした。

大変な農作業の中、高学年が力を発揮し、作業を終えましたが、力を発揮してくれた高学年男子は、現在、児童館を利用している石川県立いしかわ特別支援学校に通う高校生で、「おいしいよ農園」1年目の社長です。力を発揮してくれた女子は1年目の副社長でした。

子ども達は、多分に気分屋が多く、活動に対するムラがあり、その日の気持ちに寄り添った活動に制限することが、子どもの主体性を引き出すには必要不可欠です。

新商品の開発は、夏休みの夜にNPO指導の基、児童館に子どもと保護者、厚生員が集まり、食育も兼ね「ごはん味噌汁を見直そう」と学習会を開催し、その後8つのグループに分かれ田植えを行った、米について行いました。

グループ毎に子ども3、4人、保護者、厚生

員がひとり入り、ファシリテーターを努め、米袋の形や中に入れる米の量、種類（精米・玄米）など、グループ討議をしました。活発な話し合いが行われ、子どもの発想の豊かさを感じる面白い内容で、新商品は「めっちゃ・う米」に決まりました。

新米で握った塩むすびは、米粒がきらきら光り、おいしくて子どもの笑顔があふれました。稲刈りから精米にするまでの期間に「めっちゃ・う米」を入れる米袋のラベルデザインに取り組み、ラベルデザインで、おいしいよ農園社員の子どもが、デザインを考え、決定し、保護者がシール印刷しました。

販売にあたり、成分表に賞味期限や原料、販売元など記入が、必要なことや、販売店の決定など課題が多くあり、協議の結果、成分表は副館長に制作と、印刷を依頼することになり、販売は浅野町校区の文化祭で行うことになりました。

「めっちゃ・う米」200袋は、おいしいよ農園で栽培した白菜と地域の方から提供いただいた野菜と一緒においしいよ農園の店に並びました。販売当日は「子どもが育て、商品開発した「めっちゃ・う米」はいかがですか」「天日干したおいしいお米ですよ」「野菜は新鮮です」と子ども達の声が響きました。

「めっちゃ・う米」は、子どもが栽培から商品開発まで携わったことなどが話題を呼び、地元紙に取り上げられ、紙面を飾りました。その後、新たに米穀検査を受け、11月に金沢のデパートで、1日限定で「めっちゃ・う米」の販売を行いました。午前11時から午後3時30分頃まで農園役員の子ども7人は、休憩を取りながら、デパートの方が作った、お客さんにふるまう小さいおにぎりを手に、店の前を通る人に「おいしいですよ」「子どもが育て商品開発した「めっちゃ・う米」はいかがですか」と販売促進営業し、100袋の「めっちゃう米」は完売しました。

販売前には、おいしいよ農園社長はじめ役員の子どもは、デパートの方との名刺交換、新聞記者の取材を受けるなど緊張感の中、社会性の

獲得につながる体験ができました。その後、児童館では「名刺交換ごっこ」遊びがブームになりました。

1年目の「おいしいよ農園活動」は、全てのプログラムが初体験であり、子どもには刺激的で、学びの多い活動でした。また、「おいしいよ農園活動」を展開する中で、子ども一人ひとりの個性が発揮され、多様な人との出会いがあり、社会の仕組みや地域を知るきっかけを得、子どもの地域参画になったと思います。児童館としても地域の方や保護者や他の関係団体との交流も深まり、活動範囲が広がり、翌年以降の取組の励みになったとともに、継続的な発展に、体制の確保が課題となりました。

(2) 2年目、3年目の「おいしいよ農園活動」

経過と課題

「おいしいよ農園活動」は、前年の経験を生かして2年目、3年目と子どもが積極的に意見を述べ、活動ができるよう、子どもの主体性に寄り添った企画や運営に取り組み、地域に根ざした活動を目指しました。

2年目「おいしいよ農園活動」をより安定した活動にするため、異年齢集団を定着させる必要があると感じ、子どもがより楽しく、主体的に参加できることを目指して、農園会社の看板、おいしいよ農園キャラクター製作、農園社員としての意識化を目指した、契約証やタイムカード採用に取り組みました。

契約証は、1年目「おいしいよ農園活動」の約束事で決めた内容に、子どもが新たな約束を加え、契約証にしました。農作物の栽培、商品開発、販売は継続していますが、地域におけるおいしいよ農園の知名度はまだ低いと感じ、「めっちゃ・う米」ラベルデザイン募集に加え、おいしいよ農園キャラクターデザイン募集を小学校で展開することにしました。

前年不人気だった白菜の栽培は中止、地域に人気がある、さつまいもの収穫は、苗植えから行うこととし、「めっちゃ・う米」ラベルデザイン、キャラクターデザイン募集の方法や案内チラシは、1年目の経験が生かされスムーズに

行えるようになっていましたが、小学校での「めっちゃ・う米」ラベルデザイン、おいしいよ農園のキャラクター募集は、応募数が極端に少なく、課題も多くありました。

校長先生の許可や、募集方法など「おいしいよ農園活動」で話し合い、準備を進めました。2年目おいしいよ農園は、副社長の女子が主体的に活躍してくれ、副社長の女子が、何人かの社員を引き連れ、小学校でラベルデザインやキャラクターデザイン募集を行うため、校長先生に交渉を行ったと聞き、驚くと同時に「すごい」と感動しました。

おいしいよ農園役員の子供も達は、校長室を訪ね校長先生の要求、課題を受け入れ、交渉を続けました。「めっちゃ・う米」ラベルデザインやキャラクターデザイン、募集チラシ制作、回収ボックスを準備するなど、最後までやり遂げました。

応募の中から、先生が描いた「めっちゃ・う米」ラベルデザインや4年生女子が書いた野菜のキャラクターデザインに決まり、そのキャラクターは、着ぐるみにするか、表現をどうするか何度も話し合われた結果、子どもの原画を基に保護者が綺麗なデザイン画に描き、おいしいよ農園オリジナルシールとバッジができました。

おいしいよ農園、会社の看板も完成し、秋には「おいしいよ農園活動」の知名度を上げ、地域を知り、表現することなどを目指して、浅野町神社の祭り参加、わらで編んだ「ぼんどり」（雨具）をテーマに、おいしいよ農園オリジナルミュージカル「あさののぼんどり」に取り組み、「めっちゃ・う米」販売と共に、地域の文化祭で披露しました。

販売は手薄になりましたが、子どもはメイクをして本格的なミュージカルの発表に満足気で、地域交流にも触れることができたと思います。

活動も3年目に入り、児童館利用の子どもや1年生が「おいしいよ農園活動」に参加する様になり、前年決めた社員契約も、慣れた様でゆるく子どもに委ねるのも悪くないと感じました。

3年目「おいしいよ農園活動」は、子どもの

主体性にゆだね、田植え、稲刈り「めっちゃ・う米」ラベルデザインなど、考えながら、おいしいよ農園で育てた農作物を使い「おいしいよ農園カフェ」に取り組むことにしました。

子どもがメニューを考案し、積極的に児童館で試作、試食を行い、始めて考案したカフェメニュー「おはぎ」は、形は不揃いでしたが、美味しく、子どもも、大人参加者にも好評価でした。

そんな折、県立児童館子ども交流センターで“2018 わんぱくフェスティバル・冬 みんなの町、お店をつくろう！”を開催するから「おいしいよ農園で出店しないか」と声がかかり、出店することにしました。

わんぱくフェスティバルでは、商業高等学校生徒一人がお店のサポートに入りましたが、サポートに入った高校生より、おいしいよ農園の社員が積極的にお店の配置や販売に携わっていると実感できました。

お店での販売は、「めっちゃ・う米」2年目で制作したおいしいよ農園キャラクターシールとバッジの販売を行いました。

浅野町とは違う地域での出店は、緊張もありましたが浅野町からお買い物に来てくれる家族もいて、子ども達は楽しそうに接客を行い、お金や品物の流通など理解が進んだと感じます。

(3) 4年目、5年目「おいしいよ農園活動」

経過と課題

活動も4年目になり、継続して活動に参加する子どもが多くなり安定して「おいしいよ農園活動」に取り組むことができる様になりました。

活動を継続することで多くの人と交流し、多様な体験ができます。子ども自らが、子どもの主体性、社会性を育み、地域参画をし、浅野町の地域性や課題に気づき、「おいしいよ農園カフェ」での体験を生かし、幅広い人が集う場所で、世代間交流、地域コミュニティにつながる「おいしいよ農園移動カフェ」を開催することが、取組の励みになります。

カフェメニューの開発、移動カフェの運営、開催については、新しく連携できたNPO、老人

施設、ワイガヤクラブ（児童館お母さんの会）の皆さんと連携して、行うことにしました。カフェメニューは、「おいしいよ農園活動」で考案、NPOが作りやすさ、提供のしやすさを考慮してレシピを製作、メニューごとに分かれて試作と試食を行いました。

第1回「おいしいよ農園移動カフェ」は、老人施設のお祭りで開催、第2回移動カフェは、児童館七夕まつり横の公園で開催、第3回移動カフェは、浅野町地域の文化祭で開催しました。

第1回目の老人施設お祭りでの開催は、朝早くからおいしいよ農園の役員、社員の子ども、NPO、保護者が準備に取り掛かり、カフェは、お年寄り、家族、保護者、地域の方、小学生など多くの人で賑わいました。

子どもからは

「お年寄りがテーブルに長く座って、声のかけ方がわからなかった」

「めっちゃ・う米で作ったおはぎが完売したことやおしゃれサイダーが人気あったことがうれしかった」

「お客さんに応じたメニューやサイズを考えることが大切だと思った」など感想がありました。

「移動カフェ」開催にあたり、放課後「老人施設お祭り実行委員会」においしいよ農園社長、役員の子ども4、5人は、実行委員メンバーとして2回参加し、名刺交換も行いました。

実行委員会に、メンバーの一員として、おいしいよ農園社長や役員の子どもが参加できたことは、子どもの権利が保障されたように感じ、好感触でした。

3回目の移動カフェは、段ボールでピザ釜をつくり、ピザ作り体験をできるようにしました。9月においしいよ農園役員、社員の家族が児童館に集まりピザ釜作りを行い、食材を冷凍ピザシートにトッピングしてピザ焼き体験を行いました。段ボールで作ったピザ釜でピザが焼けた時は驚きと嬉しさがありました。

夏休みには、1年目から継続して活動に参加している4年生女子が副社長として社員をまと

め「おいしいよ農園活動」報告集と稲の観察記録を自由研究としてまとめて小学校に提出しました。

おいしいよ農園の説明の項目には「浅野っ子が運営している会社です！！お米やさつまいもなどの作物を作り商品も開発もしてきました。他にもイベントやカフェなども開き地域の人達との関わりを深めるために頑張っています！そして、おいしいよ農園を、皆さんたちに知ってもらうため日々努力しています。」とまとめられていました。

4年間の役員紹介、商品開発した商品ラベルシール、キャラクター、活動報告、活動に参加してきた子ども、ひとり一人の感想が書かれていました。

11月には、連携してきた地域の方や団体、NPOの方に参加頂き「おいしいよ農園移動カフェ」報告会と収穫祭を開催しました。当日の司会、進行など、すべて子どもが行い、パワーポイントを使い、報告資料を作成し、活動報告をまとめて発表しました。

子ども一人ひとりが役割を担い、子どもの成長を感じる報告会でした。地域の方や保護者、NPOからは、

『農園移動カフェに向けて子どもに少し背伸びをするくらいの課題を与えながら事業を進めてきましたが、次々と課題を超え、子どもの成長の速度と幅を感じ、さらなる成長に期待したいと思います。

農作業に携わり、田んぼにいる虫、田んぼにはる水などに興味を持ち、月1回の稲の観察を行うことで、田園風景を楽しみながら稲の成長、稲が育つ環境や田んぼに流れる空気を感じ、環境の変化に気づき感じたことを観察記録に書き留めることで、動植物への関心が高まり、観察力が向上し、詳細な違いにも気づくようになったと思います。そして多くの地域の方と交流する中で社会性を育み多くの達成感もあったと思います。

移動カフェの運営、開催で子どもの生き生きした姿が見られ、子どもの元気な姿は、地域を

元気にしました。』と感想がありました。

「おいしいよ農園活動」もひと段落した正月明け、おいしいよ農園で、「農園かるた」を作る遊びに発展しました。

活動5年目は、おいしいよ農園社長経験者のサポートを受け、人前では緊張であまり話ができない、4年生女子が社長に就任しました。

2020年度コロナ感染拡大もあり「おいしいよ農園活動」ができるか困惑の中「おいしいよ農園かるた」4年間の体験を基に子どもが描いた「おいしいよ農園かるた」は、仲間との体験、楽しさ、大変さなど子どもの感性で農作業体験が描かれていました。

「おいしいよ農園かるた」を製品化して地域の方に見て頂きたい、地域や連携団体、NPOと感動を共感したい、と思い「おいしいよ農園かるた」製品化に向けて話し合いました。

コロナ禍でフィジカルディスタンスが求められる状況です。リモートかるた大会を開催して、地域の皆さんと交流を行い、地域に元気を届けることができれば幸いと考え、「おいしいよ農園活動」でかるたの大きさや内容について話し合い、農園役員の子どもの印刷屋さんと話を重ね準備しました。

連携するNPOや地域の方には、リモートでかるた大会を開催する為の環境整備に協力頂き、製品化した「おいしいよ農園かるた」で何度かプレかるた大会を行い、農園役員、社員の子どもが手引書を製作し、地区社協の方や地域サロン（お年寄り）参加者の方、遠くに引っ越した友達、学校の先生、老人施設の方など地域に配布して地域を巻き込んで、実際に「おいしいよ農園リモートかるた大会」を開催しました。

5年間「おいしいよ農園活動」に取り組む中で「めっちゃう・米」エムザでの販売体験やおいしいよ農園のキャラクター製作「おいしいよ農園カフェ」、「リモートかるた大会」等を通じて、「おいしいよ農園」の子どもは、毎年入れ替わりますが、継続して参加する子どもの姿があり、その子ども達が、社長や副社長など役職を担い、活動を引っ張ってくれています。

3. 2021年(6年目)「おいしいよ農園活動」経緯と課題・展望

2021年(6年目)、あらためて、「めっちゃ・う米」の活動の関連地域を見つめ直し、子ども自身が、居心地の良い児童館と住みよい街づくりに寄与できる、児童館活動に発展する様な取り組みにしたいと思いました。

新たな商品開発として、米を原料とした加工品である米飴を挙げ、能登で米飴製作している人の了解を得たうえで、能登の米飴と連携し、子どもが育てた「めっちゃ・う米」で米飴を作りに取り組み、地域に配布、交流を深め、コミュニケーションを高めたいと思いました。

「めっちゃ・う米」が米飴になる過程を学び、同時に金沢から遠く離れた能登(150km)に、興味関心を広げることもできると考えました。

子どもが立てた年間計画に基づき、農作物の栽培、米飴のパッケージデザイン開発、専業農家に対する、米作疑問解決インタビュー開催、地域への米飴配布、活動参加者による農園タペストリー制作、収穫祭と多様な活動に取り組みました。その他、子どもの年間計画には、地域の公園で遊びの会開催、社員旅行参加、通学路のごみ拾い等がありました。

米飴の商品名は「めっちゃ・あめー」に決まり、商品は瓶に詰められ130個届き、米飴の配布は、小学校、農園社員の保護者、子どもを見守って下さるサポート隊、老人施設、地域サロン参加者の方々一人ひとりに届け、会話が弾む様に内容を考え、5日間かけて行いました。届ける人の顔を思い浮かべ、米飴の味や農園活動の説明など、メッセージに添えました。

小学校への配布調整は、社長を始め男子役員が、校長先生と行いましたが、日程調整が難しく、社長が「俺もうわからん、頭が混乱してくる」と弱音を吐くほどでした。配布後、小学校の先生一人ひとりからお礼のメッセージが届けられ、驚くと共に先生の対応が、子ども達にも、うれしかったようでした。

今年度は、コロナ禍の影響で、夏休み期間の諸活動中止・延期もあり、低下した子どもの意

欲を高揚させ、活動再開には時間を要しました。

6年間の「おいしいよ農園活動」は、素直に子どもの吸収力、行動力、表現力など、その潜在能力に、改めて「すごい」と感ずると同時に、子どもの成長を実感できる活動になりました。

児童期における遊びの位置づけや、児童館におけるプログラム活動が、児童に与える影響力の重要性を感じました。

6年間「おいしいよ農園活動」を継続する中で、培ってきた保護者、地域、学校、NPOとの連携を大切にして、農作物の栽培、商品開発、販売など、活動について再整理し、児童館で子どもが抱える課題、地域における課題を見極め、活動を展開していく事によって、児童館の存在意義と価値が、高まると考えるようになりました。

継続して「おいしいよ農園活動」に主体的に取り組むためには、資金源において自立することも重要で、おいしいよ農園で開発した「めっちゃ・う米」「おいしいよ農園さつまいも」「さつまいもアイス」「めっちゃ・あめー」など開発、商品化、販売を継続発展させたいと考えています。

今後も児童館で、子どもが仲間と共に体験する活動に取り組む事が、児童館の持つ、諸課題の解決につながる事になり、よりよい児童館(子ども達が安心して集える場所)の実現に、向けた歩みとなると信じて、活動継続に取り組みたいと思っています。